



「A Rose, Rose oil, Girosital」要約版

M. Kirov 博士、S. Vankov 博士共著

芳醇で持続性に富んだ香気から黄金の液体とも呼ばれるブルガリアローズオイル（ダマスクローズ精油）は、その奇跡的な気候風土から最高の生育条件を有するブルガリアのバラの谷で生産されています。

今でも、最高級の香水を作る上で欠く事が出来ないとされる比類無きこのローズオイルは、275種類以上ものマクロ及びマイクロ成分の極めて複合的な組成並びにそれらの絶妙な構成配分により生み出されています。

しかも、このローズオイルの価値は、単に香水用だけにとどまりません。ローズは貴重な薬剤としても珍重され、その歴史は人類文明の発祥時期にまで遡ること1000年もの歴史があります。

古代エジプト時代からローズは万能薬剤とみなされ、死体をミイラ化する際にも利用されていました。古代ギリシャ医学においては、ローズの調合剤は既に化粧用として、また産婦人科領域においても用いられてきました。

古代ローマ時代には用途の幅を広げ、ディオスコリデスは乾燥したバラの葉をワインで浸出し、それを頭痛、目と耳の病気、歯肉炎、口内炎、痔、婦人化系症状等の管理に推奨しています。また、バラの木の根は何千年もの長きに亘り狂犬病治療に使われ、バラの茎汁はイボの治療に薦められてきました。

しかし、最も一般的なものは、バラの甘美な香りを酔い覚ましとして使用することだったようです。

こうしたバラ療法が大きな発展を遂げたのはアラビア医学であり、最も貢献したのはアヴィセンナ（＝イブン・シーナ）でした。彼はさまざまなバラの加工品を生み出し、その代表的なものに、ローズハニー（Julanjubin）と砂糖又は蜂蜜で甘みをつけたローズウォーター（Julep）があります。元々肺結核の治療薬として有名だった Julanjubin は、発熱や胃痛にも推奨されました。多方面

に用いられた **Julep** は、消化管の瀉下作用により、特に発熱、胃潰瘍、消化器疾患に適しているとされました。

ローズオイルは、発熱、日射病や熱射病、アルコール中毒、外傷及び脳震とう、様々な要因によって引き起こされる頭痛に。ローズ調合剤は、虫歯、毒蛇・毒虫の解毒、丹毒、火傷などに活用されてきました。

中世時代の西ヨーロッパでは「サレルノ養生訓」を初め、薬草についての多数の文献があり、中でもローズは、最高の薬剤の一つと見なされ幅広くとりあげられています。バラの生薬は、丹毒の湿布として、蜂蜜と混ぜて歯肉や口内に塗り炎症を抑えたり、蜂蜜水と混ぜて内服して解熱用に、また下痢や婦人化系の症状には、ワインで浸出したものを使用していました。ルネッサンス期には西ヨーロッパの医療に引き継がれ、高く評価されたバラは、心臓や脳の機能強化を初めとする多種多様な症状に適用されています。

P. Dimkov は、民間療法について3巻にまとめた自身の著書（1977～1979）の中で、バラを目の病気、便秘、解熱、狭心症、肝硬変等に処方しています。ブルガリアでは、バラは薬剤としてだけでなく、栄養剤としても利用されています。朝食前に一杯の水とともに食され、皮膚の張りや艶の維持に非常に有効とされました。バラの美容効果のメカニズムは十分に解明されてはいませんが、**M. Kirov** 氏等のデータによると、ローズオイルは脂質代謝を制御し人体の疲労・老化のプロセスを妨げると示唆しています。

ブルガリアにおける最も初期の薬理学的研究は、ブルガリアの薬理学校創設者である **P. Nikolov** 教授による1941年発行の“**The Rose as Medicine** (薬としての薔薇)”があげられます。古代、中世、現代における薬としてのローズの使用法について調査を行い、驚くほどの内容を簡潔に、そして的確な表現でまとめ、有名な論文となっています。動物実験によるデータを駆使し、ローズオイルやローズ製品の神経系、循環器系、消化器系への作用や抗菌・抗寄生虫作用まで網羅しています。

V. Alexiev 教授は、抗生物質がまだ無い時代に、気管支喘息、肺膿瘍及び肺結核の治療にローズ調合剤「**Rosalipchin**」を用いて目覚ましい結果を残しました。しかし、その後数十年に亘りローズ製品の薬物療法への研究や可能性は閉ざされた状態となりました。近年この状態に変化が起き、鼻炎や口腔疫学分野（虫歯の鎮痛や充填剤及び歯周病治療）において再評価され、さまざまな試みが行われています。

ローズ製品には多くの利点があります。抗生物質に耐性を持つ菌株に対して有効に働きながら、身体への忍容性が非常に高く、アレルギー反応リスクが殆どないということもその一つです。1%のローズコンクリートを含む「Rosalin軟膏」は未治癒の傷、下肢静脈潰瘍、褥瘡性潰瘍、放射線壊死や皮膚炎、及びあらゆるタイプの火傷に使用されてきました。未治癒の傷に対する有効性は多岐に亘り、抗菌、局所麻酔、抗炎症、損傷組織の再生促進等があります。

また、ローズ精油とビタミンAの相互作用がある「Girosital」は肝実質の慢性疾患への有効性が期待できます。「Girosital」はその抗脂肪肝作用により、総コレステロール、血中トリグリセリドや低・超低比重リポ蛋白（LDL、VLDL）のレベルを低下させる一方、高比重リポ蛋白（HDL）のレベルを増加させ、動脈硬化発症に対する保護作用を発揮するとされています。

発表された実験や臨床の結果は、これまで知られていなかったローズ精油の新たな薬力学的側面を示しています。特に、心臓疾患や高齢者医療の分野における予防や治療にローズ精油への期待が高まっています。

何ものにも替えがたい薬剤として、何世紀にも亘り使用されてきたにも関わらず、その後忘れ去られた物質が、如何にして再評価されたかの好例がローズ精油なのです。予想外の治療特性が明らかになったことで、治療薬としての地位を得ました。「Girosital」、またはローズ精油とビタミンAの組み合わせは、人間の消耗や加齢プロセスの予防や治療の第一選択薬となり得ます。「Girosital」、これはバラが単に若さの象徴というのではなく、若さを与えるという、バラの魔法のような力を証明するものといえましょう。